令和４年度
学校だより

令和４年
11月４日

しおかぜ

佐渡市立
高千小学校

「思いやりと信念をもって根張れる子」を実現を目指す学校

No. 8

「子どもたちの可能性の畑」で花が咲き始めました

校長　白澤　道夫

今回のタイトル（特に「子どもたちの可能性の畑」の言葉）を見て「見覚えがあるな」と思われたでしょうか。実は、今年度第１号の学校だよりのタイトルに出てきた言葉です。

11月に入り、２学期の半分が過ぎました。たより第１号で綴った「子どもたちの可能性の畑」に植えた多くの「種」が花を咲かせ始めています。

当校では、「委員会活動」を４～６年生が担っています。自治的な活動ですので、教師の指示を受けて行う活動ではありません。各委員会で、学校生活の向上を目的として、何ができるかを考え、実行します。（とはいえ、子ども主体の活動ですので、順風満帆とはいかないことがあります。）

先日、活動が停滞気味という某委員会の悩みを受けて、全ての委員会関係者（児童と教師）を校長室に集めて、協議を行いました。（現状の報告→問題の確認→改善策の検討→共通理解）

停滞する原因（問題点）は、委員会のメンバーの士気の低下からくる「悪ふざけ」でした。

参加者から厳しい指摘が続きます。中には委員会を統合するという意見も出ています。

しかし、当該委員会のリーダーは、こう切り出すのです。

「（問題の悪ふざけについて）当人たちは反省している。もう一度チャンスがほしい。」

この間、私は、悪ふざけをした当人たちは、意気消沈しながらもリーダーの言動をとおして、自分たちを思いやり、守ろうとする姿に信頼感を抱いていると見て取れました。

その後も続く協議の中で、このリーダーは「（指摘は分かる）だけど…」と繰り返し説明しました。最後は「責任をとる。」と自ら宣言したことで全員納得・了承となりました。

厳しい意見（しかもその全てが理論的に正当なものです。）を受け止めつつ、委員会のメンバーへの思いやりと自身の信念に基づき、何度も「だけど」を繰り返すこのリーダーは、何と心の強い存在なのでしょうか。（その姿を見て、涙する児童、先生方もいました。）

【感情は論を超える】　たった一人が、かかわる全ての人の「心を動かす」場面を目の当たりにして。言葉の力を発揮するには「(強い)思い・願い」が必要なのだと考えます。

この時期、子どもたちは大きく成長します。可能性の花が開き始めやすい時期です。しかし、植物の花が咲く時期とは異なり、可能性の花が咲く時期は一定ではありません。今回のリーダーのように、いつでも、ちょっとしたきっかけで、大きな花が咲くのです。

私たち大人は、学校や家庭それぞれの役割・立場で、子どもたちが、可能性を発揮した大きな花が咲くことを楽しみにしながら、日々、「準備（教え・支え）」を進めましょう。

その際、「だけど」と自ら（そして周囲に）問い続ける言葉こそが、地域で目指す「思いやりと信念をもって根張れる子」を具現するパワーワードなのだと確信します。